

## 山崎先生との思い出

— 京町家キャンパスのことなど —

山 本 淳 子

山崎先生のご勇退にあたり思い出を振り返れば、感慨と感謝がこみ上げるばかりである。

思えば2003年1月、本学の前身である京都学園大学の採用試験を受けるために私が初めて亀岡キャンパスを訪れた時が、山崎先生とお話した最初だった。実技試験として模擬授業があり、先生方を受講生に見立てた私は、「この本文を朗読してください」と山崎先生を当てたのだ。今思えば本当に大胆で身が縮む。だが先生はにこやかに答えて古文を読んで下さった。私は紫式部を研究対象にしているが、先生が江戸時代の高名な国学者にして紫式部についての著作『日本紀の御局の考』を著した藤井高尚のご子孫であることを後になって知り、冷や汗が流れたものである。

2008年からは本学が中京区に京町家キャンパスを設けて授業を行うことになり、私は山崎先生と合同で行う授業がしばしばあって、様々にご指導頂いた。亀岡キャンパス一つがキャンパスであり、人文学部が人間文化学部、歴史文化学科が「歴史民俗日本語日本文化学科」だった時代である。日本文化を教えるうえで、京都市内の、それも祇園祭の山鉦町である新町百足屋町は夢のような好環境だった。京町家を借り受けてイベント会場などに充てる大学は他にもあったが、日常的に授業を行う大学は本学しかなく、日本中からマスコミが取材に訪れた。山崎先生は図書館長や学部長の職にあってお忙しい中、取材を一つも断られなかった。そしてしゃきっと着物をまとって、インタビューに答え授業風景の撮影に応じられた。本学が京都の伝統文化に関わる存在として、大きな注目を浴びる場に踏み出し

た初めの一步だったと思う。中京区の住民の方々は京都人中の京都人であり、他大学の中には、京都の作法に不慣れで戸惑うところもあったのではないか。しかし本学では、山崎先生が大家の小島さんや町内会の方々、祇園祭の南観音山保存会の方々とのやりとりにご尽力下さり、きめ細かに対応して下さいました。そのおかげで私も学生たちも安心して京町家での時を過ごすことができました。本当に幸せで充実した授業の日々であったと思う。

京町家では年に二度、建具などを季節のものに入れ替える「しつらえ替え」があり、学生たちも汗を流した。また6月から7月にかけては祇園祭があり、授業では南観音山の売り物になるちまきを作ったり、巡行を前に観光客の増える宵々山の日からは分担を決めて売店の売り子としての奉仕体験を行ったりした。日本を代表する祭の一つであり千年以上続く華やかな京都の祇園祭に観光客としてではなく〈身内〉の立場で参加することは、学生たちにとって大きな喜びであった。数えきれない学生たちが、ここで京都文化を知り、それを愛し、さらにはそれぞれの地域文化への愛に目覚めて巣立っていった。

祇園祭に関して私がいちばん好きだったのは、浴衣の着付けの授業である。祇園祭で売り子奉仕を行う時は、浴衣を着なくてはならない。それも、町の方々の眼鏡にかなうようなきちんとした着こなしが求められる。これは京都文化の重要な心得なのである。見た目に清々しく自分に似合う浴衣を、どう選ぶか。男子でも女子でも、先生は学生それぞれの個性に応じて、色、柄、帯とのコーディネートまで含めて助言された。その見たての速さ。そしてそれらを学生が体に合わせてみると、確かによく似合うのである。もちろん普段から能楽の稽古着として浴衣を着つけていらっしゃるからだとは思ふ。しかしそれだけではなく、個々の学生の外見のみならず性格まで、先生が細やかに見ていらっしゃることの表れなのだった。

ある年の新入生歓迎会で、教員紹介に当たった上級生が、山崎先生のことを「先生は本当に頼られて、僕たちが困っていると助けてくれる」と紹介したことがあった。先生はそれを受けて、「いつも何か役に立てないかと

思っているのです」と、微笑みながらおっしゃっていた。山崎先生、これからどうぞお元気でご活躍ください。